留学生から見た米国高等教育機関の留学生政策
-その本質とは何か-

テキサス大学サンアントニオ校大学院高等教育アドミニストレーション修士課程/
ビジネス学部国際教育プロジェクト・アシスタント　**余語 良太**
Ryota Yogo

「If I don't have friends, my life (here) is not okay.」
博士課程でコンピューターサイエンスを学ぶ中国人留学生の言葉である。彼女の言葉は米国の高等教育機関へ届いているだろうか。

日韓共催サッカーワールドカップの開幕を翌日に控えて日本中が沸き立っていた2002年５月30日、私は米国に向かう飛行機の中にいた。中学生の時に初めて英語に触れて以来、いつかは留学したいと強く思い描いていた私は、高校卒業後すぐに米国テキサス州の州立大学への進学を決めた。日本の約２倍の大きさを誇るテキサス州での４年半の留学生活は、たくさんの思い出に溢れている。目に焼き付けておきたい広大な自然も、異国の絶品料理も、言語と文化の壁に格闘しながら勉強した日々も忘れがたい。しかし、どんなに時間が経っても忘れることのできない思い出とは何か、それに気付いたのは帰国後だった。日本での社会人生活も４年目を迎えたころ、残りの人生のキャリアをどこに積み上げていきたいのか、自分は何が本当にしたくて、何ができるのか。その問いかけに対して沸きあがってきたものは、留学生活で触れた人の温かさだった。どんなに時間が経っても心と記憶に残るもの、それは人から与えられ、また人に与えたものではないだろうか。もう一度米国に戻って、「人間」に始点と支点をおいた留学生支援政策に関わり構築していきたい—最初の留学の時とはまったく違う目的をもって、私は再びテキサスの地に降り立った。

現在私はテキサス大学サンアントニオ校大学院で、高等教育アドミニストレーションを専攻しながら、米国高等教育機関の国際化に関する研究を進めている。また同大学のビジネス学部国際交流課で、教授と学生を対象としたインターナショナル・イマージョン・プログラム（教授引率のもと、学生が海外の提携校と異文化交流やインターンシップ、共同研究の場を経験できるプログラム）の推進や同学部の国際化政策に携わっている。本稿では「留学生から見た高等教育機関の留学生政策」と題し、米国高等教育機関の留学生政策の現状とそれに関する私的見解、そしてそこで生活する留学生の声を発信させていただきたいと思う。

なぜ留学生が必要なのか

今日の米国高等教育機関は様々な課題に直面している。連邦政府と州政府による教育関連予算の削減が最大の関心を集めている一方で、高等教育機関が社会に果たすアカウンタビリティ（責任説明）も求められている。くわえて学生の多種多様性は米国高等教育機関の持つ特徴でもあり課題でもある。新たに高等教育機関に進学を希望す

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

る学生は、2015年までにその約８割が人種的または文化的にマイノリティと呼ばれる学生で占められるという（McClellan & Larimore, 2009）。このような状況下で、全米4,409の大学の多くは、公式であれ非公式であれ必然的に大学の国際化や留学生の誘致を最重要事項の一つに定め始めている。大学が国際化政策を推進し留学生を誘致する利点はいくつかあるが、昨今最大の関心を集めている教育関連予算の削減という問題に限っていえば、留学生は格好の「顧客」になりうる。州立大学は財源の半分以上を連邦・州政府からの助成金に頼っているが、その助成金が削減される場合、最大の収入源は学生から徴収する授業料と大学施設の使用料になる。また私立大学は州政府や自治体からの助成金が得られにくいため、必然的に授業料からの収入に頼らざるをえない（注１参照）。米国の留学生の多くは生活している州政府へ税金を納めていないため、州内に住むアメリカ人大学生に比べて一般的に２～３倍の授業料を支払わなくてはならない。よって多くの留学生を誘致できれば大学は多くの収入を見込めることになる。また財政問題以外にも、留学生がキャンパスに多く在籍することはグローバル化が進む昨今の社会において大学の存在価値を示す指標になり、大学の体面も保たれる。あるいは留学生や卒業した元留学生をきっかけにして、海外の優れた高等教育機関や研究機関と新たなパートナーシップや友好関係を構築することが期待できれば、大学のアカデミックレベルの向上や、さらなる留学生獲得にもつながるだろう。

留学生受入れ大国の現実

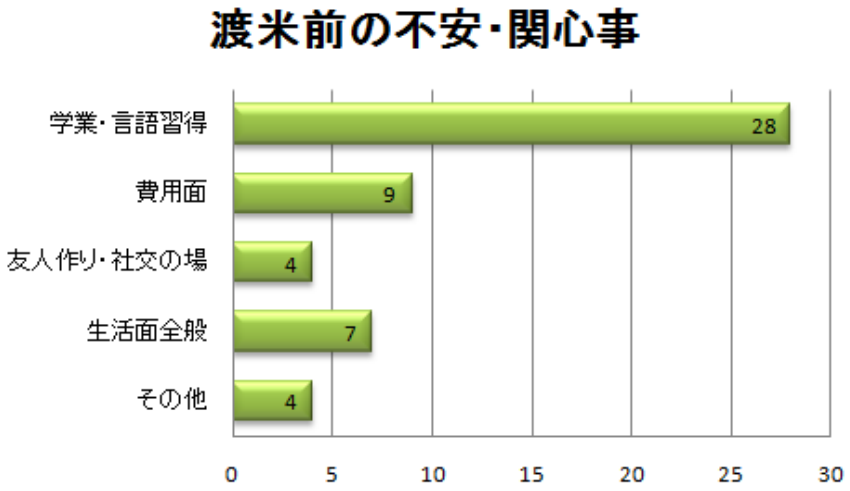
このように、留学生誘致が高等教育機関に多くの利益をもたらすこと、そして留学生人口自体の増加も手伝って、高等教育機関の国際化は先進国を中心に世界的に展開されている。また新興国でも、経済発展が著しいASEAN（東南アジア連合諸国）を筆頭に、よりよい教育環境を求めて留学を志す者は今後も増加し続けることが予想される。このような背景から、留学生獲得市場はすでに過熱気味であり、今後ますますその競争が熾烈になっていくことは想像にたやすい。長年世界で最も留学生を受入れてきた米国にとってもこれは他人事ではない。2010年の経済協力開発機構（OECD）の発表によれば、2001年に米国は世界中の留学生の約28パーセントを受入れていたが、2009年にはその数は20パーセントにまで落ち込んでいる。米国高等教育機関が留学生シェア率を落としている背景には、先にも述べた先進諸国や一部の新興国が留学生獲得市場に参入し、競争が激化している現実があることは間違いない。しかし原因はそれだけだろうか。タイムズ・ハイアー・エデュケーションが発表した今年度の世界大学ランキングによれば､世界トップ10大学のうち７大学を米国の高等教育機関が占めている。一方で、英国文化協会が留学生政策や支援を国ごとに評価したランキングでは、米国の留学生支援政策の評価は世界第６位に位置する（Jaschik, 2011）。世界トップ10大学の７つを擁している米国が､留学生支援政策では世界の５本の指にも入ることができない―私はここに、米国教育機関が抱える問題があるような気がしてならない。つまりアカデミックの質は世界屈指でも、留学生サポートがそのレベルに追いついていない、おろそかにされている現実が浮かび上がるのである。米国高等教育機関は留学生が抱える本当のニーズを把握し、それを的確に満たす支援に取組んでいるのだろうか。

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

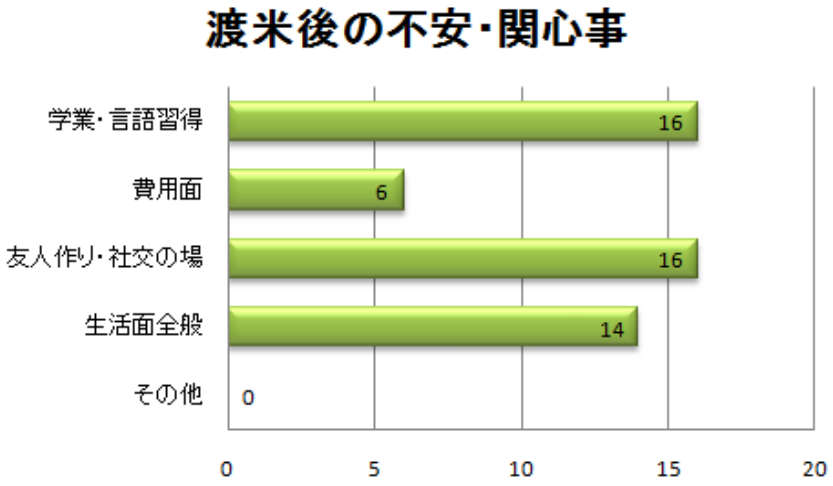
留学生の本当のニーズとは

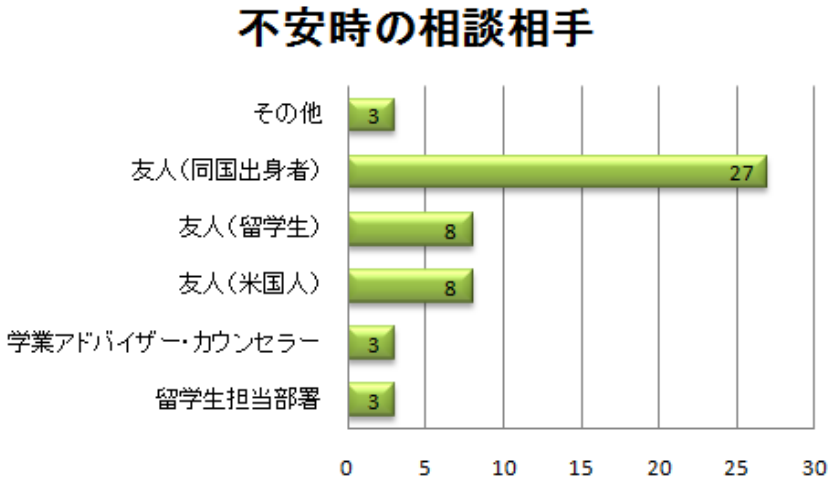
米国で留学生支援を行う非営利団体や大学関係者の統計によると、米国の留学生の７～８割が米国人の家庭へ招待された経験がないという(Purdue University; Virginia Commonwealth University; and International Students Inc.)。この数を多いとみなすか、その程度だと考えるかという議論はここでは控えておきたい。ただ、現地の人々との接触が留学生の適応能力に影響を及ぼすという結果は1979年にすでに明らかにされている（Klineburg & Hull)。またその後の研究で、孤立や心理的負担が留学生の学業の成果にも大きく影響することが確認された（Wan, Chapman, & Biggs, 1992; Robertson, Line, Jones, & Thomas, 2000; Sawir, Marginson, Deumert, Nyland, and Ramia, 2007)。逆に現地の人々との交流が頻繁に保たれる留学生は好成績を維持できる傾向が強いとの報告もされている(Surdam & Collins, 1984; Westwood & Barker, 1990; and Abe, Talbot, & Geelhoed, 1998)。このように、留学生と現地の学生、コミュニティとの交わりが、留学生の異国における総合的なパフォーマンスに影響するという点は、米国への留学生数が急増し始めた1980年前後に指摘され始めた。それから30年以上が経ち留学生受入れ大国となった米国は、今なおこの点に留意し続けているだろうか。

Wang（2007）やIkwuagwu（2010）は在籍する各大学の留学生にアンケートを実施し、大学が提供する留学生支援プログラムに関する留学生の満足度を検証している。その結果、留学生は大学が提供している学業支援を中心としたプログラムには比較的満足しているが、やはり米国人学生との交流に課題を抱えていることが明らかになっている。一方で、留学生のニーズに応えるような支援プログラムが提供されているかどうかという議論はこの研究の中ではされていない。そこで今回、留学生の声に近い立場にいるこの状況を利用し、留学生の抱えるニーズに関するアンケートを実施した。アンケートの目的は １）留学生の抱える不安や関心事は渡米前後で変化するか、２）渡米後の一番の不安や関心事は何か、３）その不安を解消するためにまず誰に助けを求めるか、を明らかにすることである。アンケートはテキサス大学サンアントニオ校の留学生に対して行われ、14カ国を代表する52名の留学生から回答を得ることができた（回答者の詳細と質問は注２，３参照)。



独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

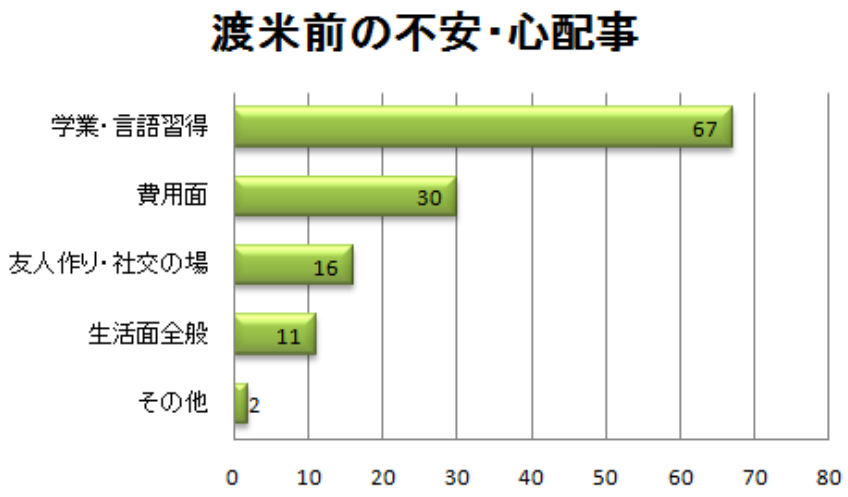


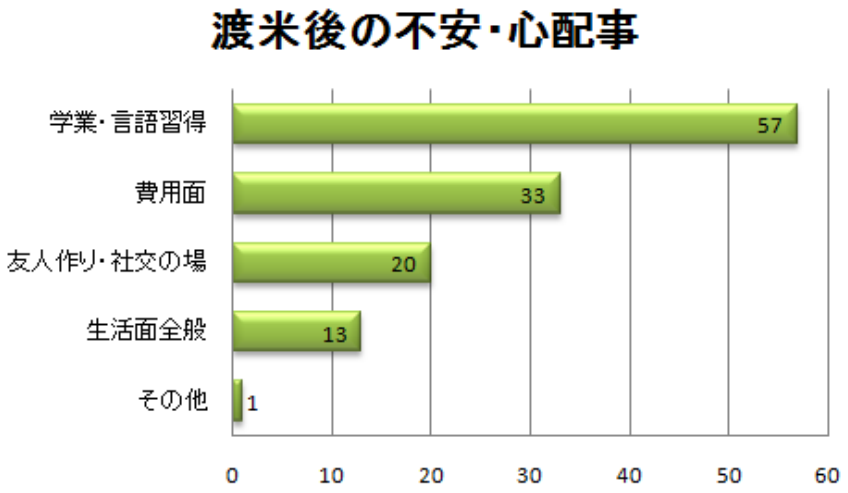


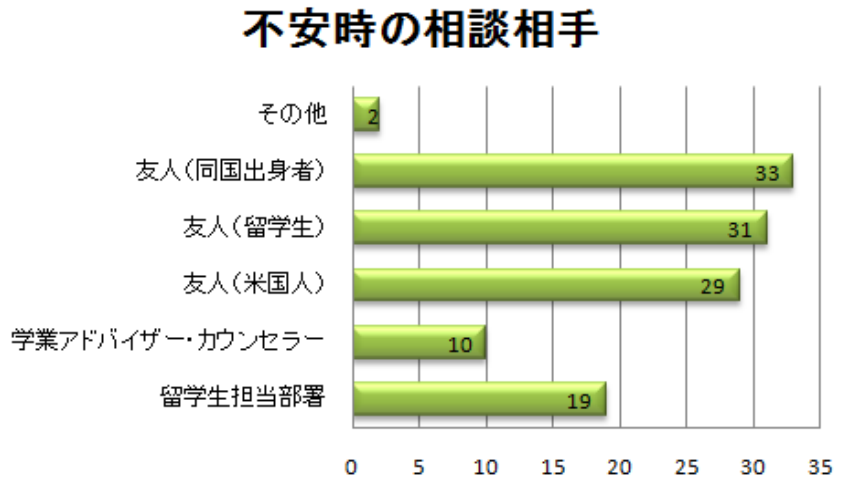
アンケートに回答した52名の留学生のうち半数以上が渡米前に抱える不安・心配事は学業・言語習得であったと回答している（53%）。しかし、渡米後は学業・言語習得と回答した留学生は減少し、友人作り・社交の場が16名（渡米前は４名）、生活全般の不安が14名（渡米前は７名）と変化した。また回答者の67%にあたる35名が渡米の前後で不安や心配事が変化している。この結果は、留学生の抱える不安や関心事は外的要因によって変化するため、定期的に留学生のニーズを把握する取組みが必要であるという指摘（Selvadurai, 1991）を裏付けるものとなった。そして助けが必要な時にまず相談する相手は、半数以上が同国出身の友人と回答している。大学の職員や教授と回答したのは約10%しかいない。留学生の友人と同国出身の友人を合わせると、全体の67%が米国人以外に助けを求めている実態が浮かび上がる。

各大学によって留学生のニーズや留学生を支援するサービスは異なっていることも考えられるため、知人の留学生や大学関係者から協力を得て、同様のアンケートを他州、他大学でも実施し、25カ国127名から回答を得た（詳細は注４参照）。

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.







他州、他大学の結果においても、渡米前後による不安や関心事の変化は半数を超える65名が経験している（51%）。しかし、渡米前と後で最も不安や関心事を集めている項目は、共に学業・言語習得面であるという結果が出た。また留学生支援で向上を期待することとして仕事の機会を求める声が多いことも明らかになった。留学中の相談

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

相手は、大学関係者が29名で全体の約23%であり、一番の相談者は同国出身の友人であった（33名）。また、留学生にとっては教授や大学関係者に相談するよりも、友人をあてにする傾向が強いことも言えるだろう(全体の73%が「友人」に相談)。

今回、少数ではあるが複数の大学機関でアンケートを実施できたことで、留学生の抱える不安・関心事は変化し、多様なニーズがあることが浮かび上がった。私の在籍する大学では、友人作りや社交の場を求める留学生の声が多いことがわかったが、そのニーズが認識されて、それを満たすようなサービスが大学側から提供されているとは言い難い。冒頭の中国人留学生の声を思い出してほしい。これでは留学生のニーズが満たされないまま大学の国際化は進み、その国際化戦略の結果としてさらに留学生を受入れるという悪循環に陥りかねない。各大学は受入れる留学生のニーズの変化に対応しながら、そのニーズを的確に満たしていくことが求められているのではないだろうか。

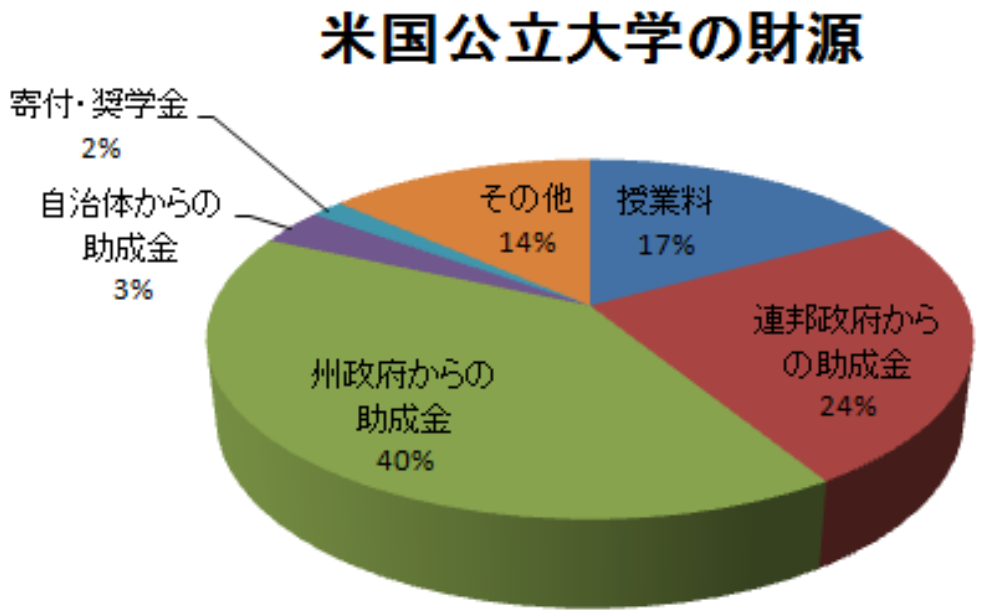
「やればできる」課題、そうでない課題

異文化への適応や第二言語運用といった障壁があるにも関わらず、米国留学生の卒業・修了率は米国人学生のそれよりも高い（U.S. Department of Education, 2010)。つまり、留学生は不安や困難の中でも学業をやり遂げているのである。大学側の学業支援の成果もあるかもしれないが、これは留学生側のみの努力で解決できる課題ともいえる。米国人学生が30分で課題を通読できるのに対して、留学生は同じ課題に２時間費やさなくてはならないかもしれないが、その努力を惜しまなければよい成績を収めることは可能なのだ。これは「やればできる」という課題である。一方で、米国という異国で社交性を身につけたりネットワークを形成していくためには、学業以上に周りの支援と理解が必要であり、これは「やればできる」というたぐいの課題とはまったく異質なものなのである。実際、多くの留学生に囲まれる環境に身を置いている私は、友人作りや居場所に不安を抱える留学生の声をたびたび耳にする。アンケート結果や多くの文献が指摘するように、米国で学ぶ留学生は現地の人々との交流に支援が必要であり、これは「留学生側の努力のみでは克服できない課題」として、高等教育機関はもっと注視すべきであろう。仮に留学生担当部署が様々な理由でこのニーズに対応しきれないとしても、留学生支援に賛同する学生グループや地域住民の協力を募り、キャンパス内外で異文化交流を促せばいい。そうすれば留学生を支援するだけでなく協力者側の異文化理解を助けるといった相乗効果も生み出すことができるだろう。それは高等教育機関が目指す包括的な大学の国際化へと繋がっていく。 Hudzik (2011) は、高等教育機関の国際化政策は、高等教育機関が提供する指導内容、研究、そして学生支援の中で、包括的な国際教育または理解を行動によって示すことと定義している。つまり高等教育機関の国際化は、ある特定の人物や部署に一任するのではなく、地域住民も含め、あらゆる関係各所に国際化の意義が理解され浸透し行動がおこされて初めて実現されうるものなのである。

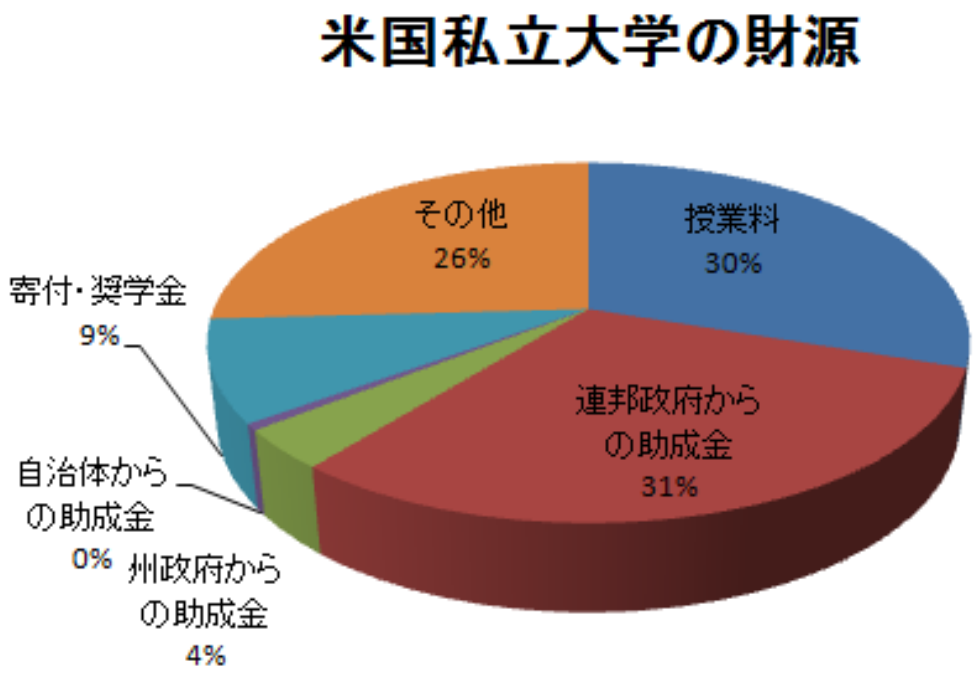
独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

私は今回の執筆を通して米国の高等教育機関を非難するつもりは毛頭ない。約４年半過ごした最初の米国留学でかけがえのない経験と出会いに恵まれ、それがきっかけで高等教育機関の国際化と留学生の支援に自分のキャリアを捧げる使命を見出すことができた。そして今５年越しにその夢を実現する機会を与えてくれているのは、やはり米国の高等教育機関である。米国留学によって人生観が変えられた者だからこそ、米国留学の魅力が損なわれ､その地で生きる留学生の抱える葛藤に心が痛むのである。留学の本質とは何であろうか。何を中心に、誰を中心にその政策は推進されていくべきなのであろうか。私は留学生政策はビジネスではなく、教育としてしっかりと認識されるべきだと信じている。学校教育の本質が学生にあるように、留学生政策の本質もまた留学生や留学を志す者にあるべきだ。なぜなら「人」を離れては良質の教育は成りたたないなのだから。留学生政策を受け取る側から留学生政策を生み出す側に立場が変化した今、私はこの「本質」に立ったところから高等教育機関の国際化という課題に挑み続けたい。

【注１】



独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.



米国連邦政府教育省（2010）の統計から作成

【注２】

質問１　渡米前に抱えていた不安や関心事は何でしたか？（最もあてはまるものを一つ選択）
１．学業・言語習得
２．費用面
３．友人作り・社交の機会
４．買い物や住居といった生活全般
５．その他

質問２　渡米後に抱えている不安や関心事は何ですか？（最もあてはまるものを一つ選択）
１．学業・言語習得
２．費用面
３．友人作り・社交の機会
４．買い物や住居といった生活全般
５．その他

質問３　助けが必要な場合、まず誰に相談しますか？（最もあてはまるものを一つ選択）
１．大学の留学生担当部署
２．学業アドバイザー・カウンセラー
３．友人（米国人）
４．友人（留学生）
５．友人（同国出身者）
６．その他

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

【注３】

テキサス大学サンアントニオ校５２名の留学生回答者

出身国	日本	３
	韓国	３
	中国	８
	台湾	５
	ベトナム社会主義共和国	１
	インド共和国	１
	バングラデッシュ人民共和国	１０
	イラン・イスラム共和国	１
	サウジアラビア王国	７
	トルコ共和国	１
	ドイツ	１
	アンゴラ共和国	８
	コンゴ民主共和国	１
	トリニダード・トバゴ共和国	１
	無記名	１
学年	学部１年生	３
	学部２年生	１
	学部３年生	２
	学部４年生	２
	大学院生	２５
	ESL	１５
	その他	１
	無記名	２
年齢	１８～２０歳	８
	２１～２３歳	９
	２４～２６歳	９
	２７～２９歳	１６
	３０歳以上	５
	無記名	３
性別	男	２９
	女	２０
	無記名	３

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

【注４】

他州・他大学の回答者１２７名の詳細

高等教育機関	コミュニティカレッジ	１９
	四年制大学（公立）	７８
	四年制大学（私立）	２
	英語学校	２５
	その他	２
	無記名	１
州	アリゾナ州	１
	カリフォルニア州	５０
	コロラド州	２０
	ハワイ州	１
	イリノイ州	２
	オクラホマ州	１
	オレゴン州	３
	テキサス州	１９
	ワシントン州	２７
	無記名	３
出身国	日本	３０
	韓国	８
	中国	１７
	香港	２
	台湾	１５
	モンゴル	２
	ベトナム社会主義共和国	４
	シンガポール共和国	１
	タイ王国	１
	ネパール連邦民主共和国	１
	スリランカ民主社会主義共和国	２
	インド共和国	９
	クウェート国	２
	イラン・イスラム共和国	２
	サウジアラビア王国	１２
	トルコ共和国	２
	ドイツ連邦共和国	７
	イタリア共和国	１
	ポーランド共和国	１
	スウェーデン王国	１
	モロッコ王国	１
	リビア	１
	カナダ	１
	メキシコ合衆国	１
	ベネズエラ・ボリバル共和国	１
	無記名	２
学年	学部１年生	７
	学部２年生	１５
	学部３年生	９
	学部４年生	９
	大学院生	５５
	ESL	２８
	その他	３
	無記名	１
性別	男	６８
	女	５８
	無記名	１

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

（参考文献）

Abe, J., Talbot, D.M., and Geelhoed, R.J.. (1998). *Effects of a Peer Program on International Student Adjustment.* Journal of College Student Development, 39(6), p.539-547.

Hudzik, J.K.. (2011). *Comprehensive Internationalization: From Concept to Action.* Washington, DC: NAFSA: Association of International Educators.

Ikwuagwu, V.O.. (2010). *International Student Satisfaction Levels with Student Support Services at Delaware State University.* (Doctoral Dissertation). Retrieved from UMI. (UMI Number: 3434959).

International Students Inc.. http://www.isica.org/isica/isi.html、にアクセス

Jaschik, A.. (Marach 11, 2011). Global Comparisons. Inside Higher Ed. http://www.insidehighered.com/news/2011/03/10/new_global_measures_released_for_evaluating_countries_and_institutions、にアクセス

Klineberg, O., & Hull, W. F. (1979). *At a foreign university: An international study of adaptation and coping.* New York, NY: Praeger.

Lewthwaite, M.. (1996). *A study of international students' perspectives on cross-cultural adaptation.* International Journal for the Advancement of Counselling, 19, 167-185.

McClellan, G.S. & Larimore, J.. (2009). *The Changing Student Population.* In McClellan, G., Stringer, J., and Associates. (Eds.) *The Handbook of Student Affairs Administration.* pp. 225-241. San Francisco, CA: Jossey-Bass.

Organisation for Economic Co-Operation and Development. (2010). *Education at a Glance 2010 Indicator C2: Who studies abroad and where?.* http://www.oecd.org/document/52/0,3746,en_2649_39263238_45897844_1_1_1_1,00.html、にアクセス

Purdue University. http://www.iss.purdue.edu/Programs/IFP/、にアクセス

Robertson, M., Line, M., Jones, S., and Thomas, S.. (2000). *International Students, Learning Environments and Perceptions: a case study using the Delphi technique.* Higher Education Research & Development, 19(1), p.89-102.

Sawir, E., Marginson, S., Deumert, A., Nyland, C., and Ramia, G.. (2007). *Loneliness and International Students:An Australian Study.* Journal of Studies in International Education, 12(2), p.148-180.

Selvadurai, R. H. (1991). *Adequacy of selected services to international students in an urban technical college.* The Urban Review, 23, 271-285.

Sumer, S., Poyrazli, S., and Grahame, K.. (2008). *Predictors of Depression and Anxiety Among International Students.* Journal of Counseling and Development, 86(4), p. 429-439.

Surdam, J. C, & Collins, J. R. (1984). *Adaptation of international students: A cause for concern.* Journal of College Student Personnel, 25, 240-245.

Times Higher Education. http://www.timeshighereducation.co.uk/world-university-rankings/2010-2011/top-200.html、にアクセス

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

U.S. Department of Education. (2011). National Center for Education Statistics. *Digest of Education Statistics, 2010 (NCES 2011-015), Chapter 2.* http://nces.ed.gov/programs/digest/d07/tables/dt07_231.asp、にアクセス

Virginia Commonwealth University. http://www.vcu.edu/oie/sss/volunteer.html、にアクセス

Wan, T., Chapman, D.W., and Biggs, D.A.. (1992). *ACADEMIC STRESS OF INTERNATIONAL STUDENTS ATTENDING U.S. UNIVERSITIES.* Research in Higher Education, 33(5), p.607-623.

Wang, Y.. (2007). *International Students' Satisfaction with International Student Services and Their College Experience.* (Doctoral Dissertation). Retrieved from UMI. (UMI Number: 3288342).

Westwood, M.J., and Barker, M.. (1990). *ACADEMIC.ACHIEVEMENT AND SOCIAL ADAPTATION AMONG INTERNATIONAL STUDENTS: A COMPARISON GROUPS STUDY OF THE PEER-PAIRING PROGRAM.* International Journal of Intercultural Reiotions, 14. p. 251-263.

Zhai, L.. (2002). *Studying International Students: Adjustment Issues and Social Support.*

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.